

深堀修道院

### 『ラウダート・シ』から学ぶ

2021年初め、当修道院にやっと『ラウダート・シ』がやってきた。遅まきながらフランシスコ教皇の知識・見識の広さ、深さに感嘆させられながら沸き上がってきたのは、神がお造りになった人との交わりのある世界への愛と、人によって壊されつつある痛みと危機感が、教皇の中にずっと通奏低音となって流れているという思いである。エコロジカルな回心は、私たちに鼓舞する霊性や内的原動力なしに持続させることはできず、永続的な変化をもたらすために必要とされるのは共同体の回心である、と教皇は言う。アシジの聖フランシスコが生きた被造界との兄弟愛や、愛の小さき道を歩んだリジューの聖テレジアの模範は総合的なエコロジーの実践へと促す霊性である。すでに1971年の使徒的書簡でパウロ6世教皇が「エコロジカルな懸念」に言及しておられたことには驚くが、これは歴代の教皇の懸念でもある。

### 世の中の動きから学ぶ

4月4日付朝日新聞グローブ紙（月1回発行）によると、2019年の自然災害による世界の保険損害額の中で日本が世界全体の3割弱を占め、2018年も2割以上にのぼったという。そのような中、日本は気候危機の最前線にあるにもかかわらず気候変動に対する意識が薄く、自然災害とCO2排出削減をセットで考える議論につながっていないとも言われる。他方、この4月から日本の高校の教科書にエコロジカルな分野が登場した。メディアではSDGSに関する特集、企業や個人、特に若者の様々な「エコな動き」の報道もよく目にする。こういった世の動きにも耳を傾けながら、“エコ実践”を打ち上げ花火で終わらせず、「意識薄い系」の側から少しずつ脱皮したいものである。



私たちの取り組みの主なもの

#### 【使徒職の場】

- ①使用済みインクカートリッジの回収
- ②ペットボトルのキャップ集め
- ③園だよりのペーパーレス化  
(2021年度から専用サイトで閲覧)
- ④包装紙、新聞、広告紙、端切れ等の教材への活用

#### 【修道院】

- ⑤食べ残しなし
- ⑥園庭や花壇の整備、空き花壇を利用した野菜作り
- ⑦外出時の飲料水用マイボトル持参
- ここ1、2年で取り組み始めたこと
- ⑧教会の使い古しのローソクを修道院の顕示用ローソクにリメイク
- ⑨共同の場所を断捨離して見やすくし、今あるものを無駄なく使用
- ⑩物が使いやすいように導線を考えて配置し直す
- ⑪米のとぎ汁を花壇に散水
- ⑫食品ロスゼロ実践



園庭で育てた巨大キャベツ

- ・買い物前に冷蔵庫や食品庫をチェックして買いすぎを防ぐ
- ・冷蔵庫の調理済みの残り物を、必要に応じてリメイクする
- ・調理担当以外の姉妹が週2回ほど昼食を作って残りがちな食材を活用

食品ロスは全体の45%が家庭で発生していると言われる。食品を廃棄することは私たちのもとに届く過程で使われた種々のエネルギーを無駄にするだけでなく、ゴミも増やす。地球を傷つける文化的な生活から抜け出すことができない私たちは、何よりも貧しく小さい人々に対して申し訳が立たない、と思う。

### ⑬ウオーキングしながらのゴミ拾いについて

ウオーキングコースの溝に捨てられたボトル類が余りにも多くて景観をそこなうため、以前目にした「ランニング中のゴミ拾い」の新聞記事を思い出し、試しにやってみた。初めは5分間でゴミ袋が一杯になり、ゴミのあまりの多さと分別に手を焼いた。しかし、数回同じ道をやるときれいになり、道行く人も「ご苦労さん」と声をかけてくれるようになった。やって初めて“エコ実践”をととても意識するようになり、自分の中の何かが変化したように感じられた。

### 諦めない生き方を

“エコ実践”は正直、手間ひまかかり、私たちにできることは限られる。だが、海、山などまだまだ自然に恵まれたこの地の風景を、子どもたちの未来にいつまでも残したいと願わずにられない。非力で微力な私たちが、それぞれの得意分野で特性を生かしつつ、“今から、いつでも、少しでも、思い出したらエコ実践”で、これからも諦めない生き方をしたいと思う。



園児を見守るグランドの聖母